

助六（助六曲輪菊）

鐘は上野か浅草の

名も懐かしき花川戸

よしやかかわせし越方を

思い出見世や清掻の

音締めのおに招かれて

問夫が名取の草のはな

思い染めたる五つ所

紋日待つ日のよすがさえ

子供がたより待合の

辻占茶屋に濡れてぬる

雨の三の輪の沓え返る

「助六さん その鉢巻は 工」

「この鉢巻の 御不審か」

この鉢巻は過ぎし頃

由縁の筋の紫も

君がゆるしの色見えて

移り変わらぬ常磐木の

松の刷毛先透額

堤八丁風誘う

目当ての柳花の雪

傘に積もりし山合いは

富士と筑波をかざし草

草に音せぬ塗り鼻緒

一ツ印籠一つ前

急くな急きやるなサヨ工

浮世は才車サヨ工

巡る日並の約束に

まがきへ立ちて音づれも

果ては口舌のありふれた

手管に落ちて睦言の

形振りゆかし

君ゆかし

「君なら」

しんぞ命を揚巻の

これ助六が前渡り

風情なりける次第なり。